

## STI 感染不安のある若者の HIV/STI 感染リスク行動に関する行動疫学研究

研究分担者：	合田 友美	(宝塚大学看護学部 准教授)
研究協力者：	松高 由佳	(広島文教女子大学人間科学部 准教授)
	柴田 敏之	(大阪府健康医療部保健医療室医療対策課)
	寺澤 昭二	(大阪市保健所感染症対策課)
	浦林 純江	(大阪市保健所感染症対策課)
	櫻井 理恵	(大阪市保健所感染症対策課)
	松村 直樹	(大阪市保健所感染症対策課)
	真木 景子	(大阪市保健所感染症対策課)
	久保 徹朗	(大阪市保健所感染症対策課)
	萬田 和志	(アルバコーポレーション)
	中村 圭奈子	(アルバコーポレーション)
研究代表者：	日高 庸晴	(宝塚大学看護学部 教授)

### 研究要旨

近年の梅毒の流行にみられるように、わが国では性感染症の流行が確認されており、国民一般における HIV/STI の知識の普及および検査受検勧奨の推進が急務となっている。こうした中、HIV/STI の感染リスクが高いと考えられる性行動が活発な一般の若者男女の特徴を捉えることは、性感染症の流行拡大防止に大いに寄与できると考えた。

そこで、エイズ予防啓発のための基礎資料を得るために、HIV/STI 検査の受検者を対象に質問紙調査を行い、性交相手との出会いの経緯や HIV/STI に関する知識・認知、予防に関する行動と認識等の背景要因を探索した。なお、本研究では、「生涯の性交相手が同性、または同性および異性の男性」を MSM 「生涯の性交相手が同性、または同性および異性の女性」を WSW と操作的に定義し、10~30 代の若者一般男女 (MSM 以外の男性、WSW 以外の女性) を主要ターゲットとして分析を試みた。調査対象は、①西日本の A 府または A 市自治体における HIV/STI 検査を 2017 年 10 月~12 月に受検した者、および②B 社の HIV/STI 郵送検査を 2017 年 12 月~2018 年 2 月に受検した者で、回収数は①3,361 人、②272 人であった。HIV/STI 検査を受検した一般若者男女の特徴として以下が明らかとなった。

- 1) 自治体が行う HIV/STI 検査、郵送検査の受検者は、いずれも男女共に 20 代が占める割合が高率であり、半数以上を男性が占め、女性の多くは 29 歳以下で 10 代では 7 割以上を女性が占めた ( $p < 0.05$ )。
- 2) 男女が性交相手と出会う経緯 (6 ヶ月以内) として最も多かったのは、「お金を払った」で 20 代・30 代の男性では約 5 割を占めた。また、「インターネット」は自治体および郵送検査において共に高率であり、自治体で検査を受検した 10 代 (31.8%) の「インターネット」利用による出会いは 50 代以降 (15.5%) の約 2 倍を占めた。さらに、「友人・知人の紹介」で出会う割合は、10 代~30 代において 25.0% 以上で 40 代以降に比して有意に高く、加えて「クラブ」は 20 代~30 代の若者の出会いの場であり、他年代と比べ明らかな差を認めた ( $p < 0.01$ )。
- 3) 毎回コンドームを使用している者は自治体、郵送検査共に 3 割以下で、自治体検査を受検した 20 代 30 代女性を中心に「妊娠を希望するから (コンドームを) 使わない」が約 2 割いた。また、一般男女全体でみるとコンドームを使用しない理由として最も多いのは「コンドームを使わない方が一体感がある」で、年代が上がるほど高率になる傾向にあった ( $p < 0.05$ )。
- 4) (過去 6 ヶ月間の) コンドーム所持率をみると「いつも身近に持っていた者」は自治体検査を受検した人のうち 10 代男性 (55.6%) が最も高率で、「持っていなかった者」の割合が最も高いのは、20 代女性 (58.0%) であり、男性に比して女性の所持率が顕著に低かった ( $p < 0.01$ )。
- 5) 29 歳以下の女性の 6 割以上が、(過去 6 か月間において) 性交相手とコンドーム使用に関して話題にしていた ( $p < 0.05$ )。その一方で、(性交時に) コンドームを使用しない理由として、「(コンドームを) つけて (つけよう) って言えないから仕方ない」という思いを抱いている女性 (29 歳以下) が約 2 割いた。
- 6) 郵送検査受検者のうち、「いずれかの性感染症に罹患したことがある者」は全体の約 2 割で、なかでも女性 (特に 20 代) の罹患率 (34.5%) が高率であった。このうち罹患歴がある性感染症で最も多いのは「クラミジア」(27.3%) であった。
- 7) 郵送検査受検者のうち「過去 5 年間に日本で感染報告数が 5 倍以上増加した性感染症は梅毒である」

の正解率は男女全体で55.4%であり、「HIVの治療薬には1日1錠の内服で効果を発するものがある」では23.4%と著しく低率で、年代や性別による有意な差は認めなかった。

8)「(HIVを含む)性感染症予防の啓発で効果的だと思う方法」では、《学校教育の充実》《インターネット・メディアの活用》《公共機関での啓発》《風俗店での啓発》《検査機会の増設》があった。

## A. 研究目的

近年、わが国の性感染症の流行が確認され、10～40代の男性同性間性的接触感染による梅毒の急増が問題となっている。また、女性の梅毒感染者数も増加傾向にあることから、一般男女への感染流行の波及の可能性があり、なかでも罹患率の高い層に対する予防的介入が急務である。

しかしながら、一般男女のうちHIV/STI感染のリスクが高いと考えられる性行動が活発な若者を対象にした研究は未だ十分とはいえず、その特徴を探ることは優先すべき課題であると考えた。

そこで、本研究では、HIV/STI感染リスクが高い一般若者男女を抽出する一つの方法として、感染への不安を抱きA府またはA市自治体、B社（郵送検査）においてHIV/STI検査を受検した人を対象に質問紙調査を実施した。そして、MSM（Men who have sex with men）を「生涯の性交相手が同性、または同性および異性である男性」、WSW（Women who have sex with women）を「生涯の性交相手が同性、または同性および異性である女性」と操作的に定義し、10～30代の一般男女（MSM以外の男性、WSW以外の女性）を主要ターゲットとして背景要因を分析し、その特徴を明らかにした。

本調査における質問紙の内容は、基本属性、性交相手との出会いの経緯やHIV/STIの症状や治療に関する知識、感染予防行動に関する認識とその実際、HIV/STI検査の受検歴、性感染所の既往歴等とした。

## B. 研究方法

### 1. 調査時期、対象および調査項目

#### 調査1：自治体検査受検者調査

調査期間は2017年10月～2018年1月。調査対象は、A府またはA市自治体を実施しているHIV/STI検査（以下、自治体検査）の受検者3,682人である。調査項目は、属性（年齢、性別、性交経験の有無、HIV/STI検査の受検歴、HIV/STI感染既往の有無）、金銭授受による性交の有無、性交相手と出会った経緯、コンドームの使用状況、コンドームを使わない理由などである。

#### 調査2：郵送検査受検者調査

調査期間は2017年12月～2018年2月。調査対象は、B社が販売しているHIV/STI郵送検査（以下、郵送検査）受検者である。調査項目は、属性（年齢、性別、居住地、結婚の有無、性交経験の有無、HIV/STI検査の受検歴、HIV/STI感染既往の有無）、性交相手と出会った経緯、

HIV/STIの知識、コンドームの使用状況、コンドームを使わない理由、効果的だと考える性感染症予防の啓発方法などである。

### 2. 分析方法

分析にあたり、集団の偏りを考慮して図1、2の通り分析対象を抽出した。「性交経験のある」者を限定して、自身の性別、性交相手の性別が「無回答」の者、性別で「その他」を選択した者を分析対象から除外。「生涯の性交相手が同性、または同性および異性の男性」をMSM、「生涯の性交相手が同性、または同性および異性の女性」をWSWと操作的に定義して、MSM、WSW、MSMを除く男性（以下、男性）、WSWを除く女性（以下、女性）をそれぞれ抽出した。今回はサンプル数の限界を考慮して、MSM、男性、女性の3群を対象に年代毎の差異を確認し、10代から30代の一般男女（男性および女性）を中心にその特徴を検討した。基本統計量の算出にはIBM SPSS ver25.0(Windows)を用い、 $\chi^2$ 検定をおこなった。有意水準は5%未満とした。自由記述回答データは、意味内容の類似性により分類し、その傾向をみた。

本研究は、宝塚大学看護学部研究倫理委員会の承認を得て実施した。

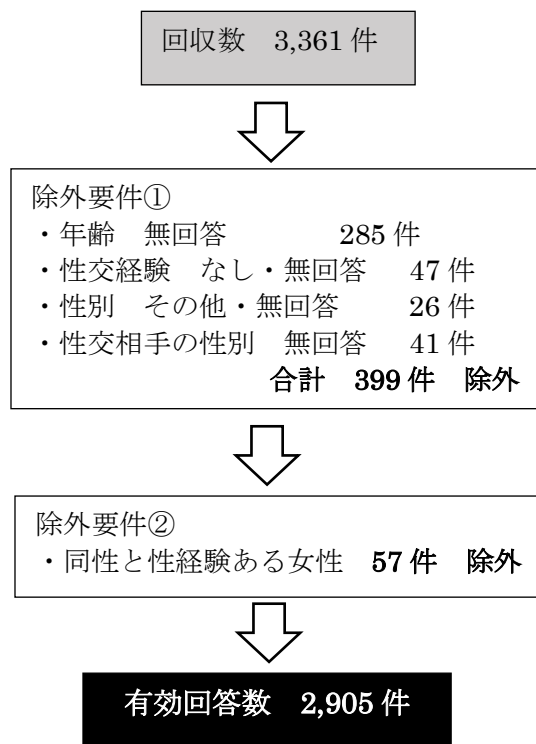


図 1. 自治体検査受検者における分析対象者抽出の過程

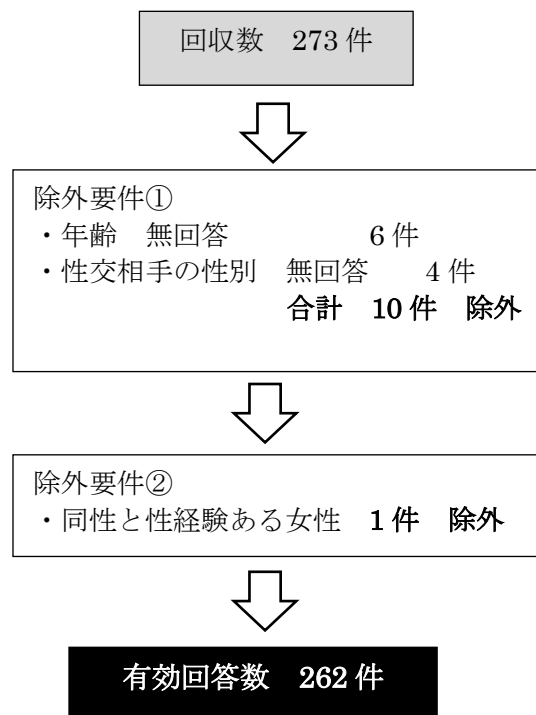


図 2. 郵送検査受検者における分析対象者抽出の過程

## C. 研究結果

### 調査 1：自治体検査受検者調査

#### 1. 回答者の分布

本研究の回収数は 3,361 件 (91.3%) で、有効回答数は 2,905 件 (86.4%) であった。

年齢、性別について、分布を表 1 に示す。

回答者の年齢分布をみると、最低年齢 16 歳最高年齢 82 歳 (平均年齢 35.2 歳) で 38.3% を 20

代が占め、10 代～30 代で全体の 67.7% を占めた。性別では男性 1,540 人 (53.0%) 女性 755 人 (26.0%) MSM610 人 (21.0%) で、一般男女、MSM とともに 20 代の受検率が最も高かった ( $p < 0.01$ )。なかでも、10 代は、女性 35 人 (67.3%)、男性 9 人 (17.3%)、MSM8 人 (15.4%) で女性が有意に高率で、男性の 3 倍以上を占めた。そして、女性の受験者の大半を 20 代が占めており、若者女性の受検率の高さが明白となった。20 代は男性の占める割合が女性を上回り、30 代以降では男性が女性の 2 倍以上を占めた。また、MSM は、30 代以降になると女性の割合を上回っていた。

#### 2. 性交相手との出会いの経緯 (表 2)

「性交相手との出会いの経緯」は年代により有意な差 ( $p < 0.05$ ) を認め、10 代～30 代の「性交相手と出会いの経緯 (6 ヶ月以内)」で最も多いのは「インターネット」と「友人・知人の紹介」であり、10 代の一般男女の「インターネット」利用 (31.8%) は 50 代以降 (15.5%) の約 2 倍を占めた。なお、MSM の 10 代は「インターネット」での出会いが 87.5% と著しく高く、特に異なる傾向を示した。

一方、「友人・知人の紹介」で出会う一般男女の割合は、10 代～30 代において 25.0% 以上であり、40 代以降に比して有意に高かった。さらに、「クラブ」は 20 代一般男女 1 割以上の出会いの場となっており、他年代と比べ明らかな差を認めた ( $p < 0.01$ )。

「(過去 6 か月間に) 相手からお金をもらってセックスをしたことがある者」は 176 人 (6.1%) で、このうち女性は 110 人と半数以上を占めた。

「(過去 6 か月間に) 相手からお金をもらってセックスをしたことがある者」が性交相手と知合う経緯は、「性風俗店」121 人 (68.8%) が多数を占め、「SNS や出会い系サイト」は約 2 割に留まっていた。ただし、10 代の女性では、「お金をもらってセックスをした」相手と「SNS や出会い系サイト」で出会う機会が特に多く、44.4% を占めた。

「(過去 6 か月間に) 相手へお金を払ってセックスをしたことがある者」は 977 人 (33.6%) で、このうち男性が 870 人と大半を占め、年代が上がるほど有意に高率であった ( $p < 0.05$ )。そして、男性は「(過去 6 か月間に) 相手からお金をもらってセックスをしたことがある者」よりも「相手へお金を払ってセックスをしたことがある者」の割合が圧倒的に多く 30 倍にのぼった。なお、「相手へお金を払ってセックスをした」相手と知り合う経緯は、圧倒的に「性風俗店」が多数であった。

他方、MSM は「相手へお金を払ってセックスをしたことがある者」が 16.7%、「相手からお金をもらってセックスをしたことがある者」が 5.9% で、出会いの経緯は一般男女に比して、

「SNS や出会い系サイト」が高い割合を占めていた。

### 3. HIV検査またはHIV以外の性感染症検査の受検と罹患 (表 3、4)

「(過去に) HIV 検査を受検したことがある者」は10代12人(23.1%)、20代491人(44.1%)で20代までは受験者の半数を下回った。その一方で、30代492人(61.3%)、40代380人(67.1%)、50歳以上230人(61.8%)と30代以上はいずれも6割を超えており、年齢を重ねるほど再受験率が高くなる傾向にあった ( $p < 0.01$ )。

「(過去6ヵ月以内に)HIV検査を受検した者」は、10代一般男女が77.8%と有意に高率であり ( $p < 0.01$ )、中でも10代女性は85.7%と高く、短期間で受検を繰り返す傾向にあることが示唆された。

また、今後の再受検の見通しについて、「6ヵ月に1回くらい受検する」と回答した者の割合は10代の女性が42.9%と最も高かった。そして、「新しいパートナーができたとき、できそうなときに受検する」と答えた人は20代(28.3%)が他年代と比べ高率であり、有意差を認めた ( $p < 0.01$ )。これらは10~20代の一般男女の受検パターン(きっかけ)の特徴であるため、「定期的な受検」を促すとともに「新しい相手との性交が感染の機会となり得ること」の認識を高めることが、効果的な予防策となり得ると考えられる。

今回の受検理由として「性風俗店の利用による感染」を心配している者の割合は、男性46.7%、女性6.4%、MSM13.1%であり、「性風俗店の利用による感染」を主な受診理由としている男性の年代による差は認めなかった。

さらに、「(過去に) HIV 以外の性感染症に罹患したことがある者」は各年代でほぼ同率であり有意な差はないものの、40代MSMに限り48人(37.2%)と特に高率であった ( $p < 0.05$ )。

### 4. 感染予防と背景要因 (表 5)

「毎回コンドームをつけている者」は男性27.2%、女性19.1%、MSM27.2%と3割を下回っており、特に女性が低率であった。年代別にみると、男性では20代33.7%、10代33.3%、30代24.5%と20代が最も使用率が高く、女性においても同様の結果であり、29歳以下の方が30歳以上に比して「毎回コンドームを使用する者」の割合が高率であった。男性がコンドームを使用しない理由で最も多いのは「コンドームを使わない方が一体感がある」31.8%で年齢が高くなるほど高率になる傾向にあり ( $p < 0.05$ )、次いで「今まで大丈夫だったから、今回もきっと大丈夫」13.3%があった。これに対して、女性では、「妊娠を希望するから使わない」と回答した者が20.9%で30代において有意に高率であった ( $p < 0.05$ )。その他「コンドームを使わない方が一体感がある」19.6%は年代による差はなく、

「今まで大丈夫だったから、今回もきっと大丈夫」15.6%は20代が19.3%と特に高かった ( $p < 0.05$ )。また、「つけて(つけよう)って言えないから仕方ない」14.3%は、男性1.6%に対し、29歳以下の女性の割合が特に高かった ( $p < 0.05$ )。

「(過去6ヵ月間の)コンドーム所持率」をみると「すぐに使えるようにいつも身近に持っていた者」の割合が最も高いのは10代男性(55.6%)であった。一方、「持っていないかった者」の割合が最も高いのは、20代女性(58.0%)であり、男性に比べ女性の所持率は顕著に低かった。男性では年代が高いほど「持っていないかった者」の割合が高率で、30代以降は約40.0%を占めるのに比して、29歳以下は25.0%前後と低率であり、10代20代の若者男性の所持率が他の年代と比べて高いことが明らかとなった ( $p < 0.01$ )。

また、「(過去6ヵ月間の)性交相手とのコンドーム使用に関する話題の有無」について問うた結果、女性10代68.6%、20代60.5%と29歳以下の女性では高い確率で話題にしていた。一方、「話題にしていない」者は男性(54.4%)の割合が高かった。さらに、「過去6ヵ月間において性交相手とHIV/STI感染症の予防について話題にしたか」を問うた結果、「話題にした者」は10代が最も多く、このうち男性(44.4%)、女性(48.6%)とそれぞれ約半数を占め、一般男女の傾向として、年齢があがるにつれて話題にしないう傾向にあった。

## 調査2 : 郵送検査受検者調査

### 1. 回答者の分布

本研究の回収数は272件で、有効回答数は262件(96.3%)であった。年齢、性別、居住地、婚姻の有無について、分布を表6に示す。

回答者の年齢分布をみると、最低年齢17歳、最高年齢77歳(平均年齢36.0歳)で20代が37.4%と最も多く、20代~30代で全体の65%を占めた。MSM31人(11.8%)、男性176人(67.2%)女性55人(21.0%)で男性が多くを占めた。このうち10代は、全員が女性で、20代以降は男性の占める割合が高く、20代は男性が女性の約1.5倍で、30代では約6倍と男女比が大きく異なっていた ( $p < 0.01$ )。また、居住地は関東(含山梨)が最も多く、20代の男性の22.0%、女性の22.9%が該当した。

婚姻の有無では、73.7%は未婚者で、一般男女を比較すると男性68.2%に比して、女性は81.8%と未婚率が高く、年代毎にみると20代の未婚者の割合は、男性94.0%、女性88.6%と特に高率であった。

### 2. HIV検査またはHIV以外の性感染症検査の受検と罹患 (表 7、8、9)

「(過去に) HIV 検査を受検したことがある

者」は10代1人(50.0%)、20代34人(34.7%)で20代までは各年代の半数以下であるものの、30代37人(50.7%)、40代27人(55.1%)は半数を超えた。「(過去に)HIV検査を受検したことがある者」の受検場所の内訳をみると、いずれの年代も「(過去に)郵送検査を受検した者」が「(過去に)保健所で受検した者」と「(過去に)病院・クリニック・診療所を受診した者」の倍以上を占めた。ただし、一般男女は「郵送検査を受検した者」の割合が高率であるのに対して、MSMは「郵送検査を受検した者」と「保健所での検査を受検した者」の割合の差が小さく、一般男女とMSMで異なる傾向にあった。

他方、「(過去に)HIV以外の性感染症検査を受検したことがある者」は10代1人(50.0%)、20代40人(40.8%)、30代36人(49.3%)と30代までは各年代の半数を下回った。それに比べて、40代は27人(55.1%)、50代以上も22人(55.0%)と40代以降では5割を超えていた。

そして、「いずれかの性感染症に(過去に)罹患したことがある者」は全年代で59人(22.5%)を占め、なかでも女性の罹患率は34.5%と特に高率であった。さらに、年代別にみると20代のうち27人(27.6%)が「罹患経験がある」と回答しており、女性は15人いた。罹患したことのある性感染症の種類について内訳をみると、「クラミジア」が最も多く37人(14.1%)で、「淋菌感染症」19人(7.3%)、「尖圭コンジローマ」7人(2.7%)、「性器ヘルペス」6人(2.3%)、「梅毒」5人(1.9%)と続いた。

「周りの友人や知り合いにHIV/STIに感染している人がいると思うか」を問うた結果、「いる」または「いると思う」と答えた人の割合は全体の約1割で、20代30代にやや多い傾向にあった。

### 3. 性交相手との出会いの経緯 (表10)

「性交相手と出会ったきっかけ(6ヶ月以内)」で最も多いのは「お金を払った」が38.5%である。年代別にみると、20代、30代の男性が52.0%、52.8%と高率で、女性の同年代に該当者はおらず、明らかに異なる傾向を示した。「お金を払った」うち、9割以上が「異性との性的接触による感染」を心配しており、「同性との性的接触による感染」を心配している者は極低率であった。一方、「お金をもらった」のは、20代30代の女性が多く、それぞれ6人(17.1%)2人(22.2%)であった。「(過去6か月間に)相手からお金をもらってセックスをしたことがある者」のうち、約9割が「異性との性的接触による感染」を心配しており、同性との性的接触者は低率であった。

次いで「性交相手と出会ったきっかけ(6ヶ月以内)」として多いのは「インターネット」であり24.8%を占め、10代から20代に高率であった。そして、MSMの71.0%が「インターネット

」で出会う傾向にあり、一般男女の18.6%を大きく上回っていた。

さらに、「友人・知人の紹介」が17.2%と続くが、これは、20代から30代の一般男女に多かった。なお、「クラブ」は20代から30代に限定しており、一般男女では8人(3.5%)が該当していた。

### 4. 感染予防と背景要因 (表7、9、11)

HIV/STI感染について相談できる相手が「いない」と回答した者は、全体で134人(51.1%)と誰にも相談できずに受検に至っている人が半数以上を占めていることが浮き彫りとなった。また、相談できる相手が「いる」と答えた者の内訳をみると、10代から30代の男女では「友人」が多く、10代は50.0%、20代は34.1%、30代では25.8%であり、40代以上と異なる傾向を示した。

「コンドームを使わない理由として思い浮かぶ言葉」を選択してもらったところ、「毎回コンドームを使っているのに、あてはまらない」者は10代が最も高率で、20代、30代と続いたが、一般男女の全体で55人(23.8%)と、装着率の低さが明らかとなった。同設問において「妊娠を希望するから使わない」と回答したのは一般男女全体のうち43人(18.6%)であり、39歳以下に多いものの年齢による有意な差はなかった。そして、男性が「コンドームを使わない理由」として最も高率なのは「コンドームをつけない方が一体感がある」であり、一方、女性では、「この人とできるなら、コンドームをつけなくてもいい」「つけようって言えないから、仕方がない」と回答した人が多かった。

「性感染症に感染しても症状が出ないことがある」では、男性の正解率が8割以上と高く、男女のどの年代においても6割以上が正答できた。その一方で、「過去5年間に日本で感染報告数が5倍以上増加した性感染症は梅毒である」の正解率は男女全体で55.4%であり、20代女性および30代女性の正答率は、45.7%、33.3%とそれぞれ低率であった。さらに、「HIVの治療薬には1日1錠の内服で効果を発するものがある」では年代や性別による有意差は認めないものの、一般男女の正答率が23.4%と著しく低率であった。

### 5. 効果的だと考える性感染症予防の啓発方法

「HIVを含む性感染症予防の啓発には、どのような活動が効果的だと思うか」を問うた結果、表12のような記述があり、「学校教育の充実」や「インターネット・メディアの活用」「公共機関での啓発」「風俗店での啓発」「検査機会の増設」(その他)の6つのカテゴリーに分類できた。なかでも、「インターネット・メディアの活用」に関する記載が多く、「テレビコマーシャルやSNSでの情報発信」や「YouTube」での情報発

信等によって、〈プライベートな時間や場所で自由に情報が得られる配慮〉をしつつ、〈身近な題材の活用〉をして〈正しく分かりやすい情報の提供〉に努めることで、〈若い世代をターゲットとした普及の推進〉に繋がるという意見が多くみられた。

次いで、《学校教育の充実》では、〈教育機関での学習機会の設定〉を望む記述が多く、小学生や中学生を対象とした〈早期から始める定期的な性教育の実施〉を求める声があり、〈正しく具体的な情報の提供〉および〈性感染症に特化した教育の提供〉が重要だと考えられていた。また、教育に際し「性教育をタブーとせず積極的に教育する」ことが大切だという意見があった。そして、「駅や町」、「病院」、「電車内」等《公共機関での啓発》をポスターや小冊子、情報誌を用いて行う方法を提案する意見が複数あり、「世間に認知してもらえるイベントの開催」が効果的であるという声があった。さらに「利用制限」や「感染の危険性の周知等、《風俗店での啓発》にも力を注ぐとよい」という記述も認められた。

一方、受検を推奨する意見も多数あり、《受験機会の増設》のために、〈受験に対する意識変容の促進〉が不可欠であるとともに、「健康診断での検査を可能にする」など〈より身近で手軽な検査（システム、方法）の構築〉を期待する声が複数あり、〈受験時の助成の充実〉を図りながら〈定期的な検査の義務化〉を導入するといった提案もあった。

#### D. 考察

本研究は、A府またはA市自治体、B社においてHIV/STI検査を受検した人を対象に質問紙調査を実施したものである。この結果を基にHIV/STI感染のリスクが高い（感染不安のある）一般若者男女の特徴を以下に整理し、訴求性を高める工夫について考察を加える。

まず、受検者の属性分布を年齢別にみると、20代が全体の約4割、10～30代で7割を占め、わが国で話題の一般若者男女のHIV/STI感染リスクの高さ（感染不安の実在）を示す結果となった。中でも、10代は女性の割合が高く、20代では一般男女の割合が有意に高くなる傾向があるため、これらをターゲットとした感染予防策の充実が重要であることが再確認できた。

次に「(過去の) HIV/STI検査の受検率」をみると、10代、20代は半数以下、30代は半数以上に「HIV検査の受検歴」があり、「STI検査の受検歴」もほぼ同様であった。感染リスク（感染不安）のある一般若者男女のうち、半数前後は受検を繰り返していることをふまえながら、これらの層の受検理由について、何に依拠しているのか（感染リスクの高さ、予防意識の高さ等）を今後、精査する必要があると考えられる。

例えば、調査1において、「(過去6か月間に) 相手からお金をもらってセックスをしたことがある者」は176人(6.1%)で、このうち「(過去に) HIV検査の受検歴」がある者の年齢内訳では10代から30代が約8割を占め、うち6割以上が女性であった。この中にはコマーシャルセックスワーカーが含まれることも推測されるが、金銭接受の相手と出会う経緯は、「性風俗店」に限らず、10代から30代では「SNSや出会い系サイト」が多いことから、一般若者男女の出会いの経緯をふまえると、「インターネット」や「SNS」を活用した啓蒙活動が不可欠かつ有効であるといえる。また、受検者の中で最も割合の多い20代の若者男女の出会いの場である「クラブ」を活かした介入も重要である。調査2の「効果的だと考える性感染症予防の啓発方法」に関する自由記述においても、「風俗店の店頭等での（情報）発信」や「風俗店で無料検査」など出会いの場に注目した介入が多く挙げられており、特に金銭授受により性交相手と出会う若者をターゲットとした場合には、大いに効果が期待できる。また、「SNSとの連携」「SNSなどのスマートフォンでの広告・啓発」他の提案も複数あり、「頻繁」で「定期的」かつ「積極的」な情報発信と「プライベートな時にプライベートな場所」において情報を閲覧できるシステムの構築が重要である。そして、「世間（若者）に認知してもらえるイベントの一つとして「クラブイベント」があり、これを拠点とすることで訴求性を高めることができる可能性がある。

さらに、10代の女性の4割以上が「6ヶ月に1回くらい受検する」と回答しており、20代の約3割が「新しいパートナーができたとき、できそうなとき」にHIV検査を受検すると回答している。このことから、感染を広げないためにも、パートナーと一緒に検査を受けることの必要性を含めて、これらのタイミングを活かした対象層への啓発が必須であると考えられる。

「(過去6ヶ月間に) セックス相手とHIV感染症や性感染症の予防について話した者」の割合は全体では低率だが、10代では約半数と高率であり、「コンドームの所持率」も10代が最も高率であった。これらは「学校教育」の成果とも考えられ、「学校教育」の更なる充実が叶えば、性感染症予防の効果が期待できる。子どもへの働きかけが、ひいては親世代への啓発へつながる可能性も期待できることから、小・中・高校生といった10代の若者に対する集団教育が不可欠であろう。なお、29歳以下の女性で「(過去6ヶ月間に) セックス相手とHIV感染症や性感染症の予防について話した者」の割合は6割以上と高率であるにも関わらず、20代女性の「コンドームの所持率」は最も低く、(性交時に)コンドームを使用しない理由として、「(コンドームを)つけて(つけよう)って言えないから仕方ない」という思いを抱いている女性(29歳以下)

が約 2 割いた。このため、まずは若者女性がコンドームを所持することを一般化し、使用を提案しやすい状況を整え、HIV 感染症や性感染症の予防について（性交相手と）話題にすることを後押しすることで、即時性のある効果が期待できる。

調査 1 には含まれない調査項目であるが、調査 2 において、（過去の）性感染症の罹患率を概観した結果、「クラミジア」と「淋菌」の罹患率が特に高率であった。クラミジアは、男性に比べて女性では特に症状に気づきにくく、しかも身体に深刻な影響を受けやすい。このため、正しい知識の習得と予防の認識および行動化が必須である。ただし、「性感染症に感染しても症状が出ないことがある」「保健所で名前を言わずに無料で HIV 抗体検査ができる」「性感染症にかかっていると HIV に感染しやすい」の正解率はそれぞれ 7 割以上であるのに比して、「過去 5 年間に日本で感染報告数が 5 倍以上増加した性感染症は梅毒である」の正答率は約半数で、「HIV の治療薬には 1 日 1 回 1 錠の内服で効果を発するものがある」は 3 割以下と非常に低率であった。これより、性感染症の動向を正確に伝え注意喚起することで、性感染症の予防としてのコンドーム使用を強く認識できるような啓発方法（内容）に転じていく必要がある。また、症状や受検方法に併せて、治療法に関する情報を提供することも重要であろう。

前述したように、出会いの経緯をふまえると一般若者男女の傾向として、「インターネット」や「SNS」の使用率の高さがある。しかしながら、インターネット上には多くの情報が氾濫しているため、必ずしも彼らが、必要としている正しい情報に確実にアクセスできるとは限らない。そこで、若者男女が通う「学校」、感染不安のある受検者が集う「病院」および「保健所」、日常的に利用する「駅」などの「公共機関」、若者男性がセックス相手と出会うことの多い「風俗店」等を情報発信の中核とし、そこから「インターネット」や「SNS」を活用して正しい情報へ定期的にアクセスできる仕組みを構築することで、訴求性を高めることが重要であると思われる。

## E. 結論

本調査の対象の大半は男性で 20 代が多くを占め、女性のほとんどが 29 歳以下であることから、感染不安のある若者男女への介入の必要性が明白となった。

具体的な介入には、出会いのきっかけを活かし、「インターネット」や「SNS」「友人や知人」「クラブ」等での啓蒙活動が有効である。なかでも、20 代女性の性感染症の罹患率（34.5%）が高率で、29 歳以下の女性の 6 割以上が、性交相手とコンドーム使用に関して話題にしている実態から、これらを強みとして、若者女性のコ

ンドームの所持を一般化し、女性からも性感染症予防としてコンドームの使用を提案できる風土や文化を創ることが効果的である。

また、「過去 5 年間に日本で感染報告数が 5 倍以上増加した性感染症は梅毒である」ことや「HIV の治療薬には 1 日 1 錠の内服で効果を発するものがある」ことの認知度が低い。これより、まずは性感染症の動向を正確に伝え注意喚起することで、性感染症の予防としてのコンドーム使用を強く認識できるような啓発方法（内容）に転じ、そのうえで、症状や受検方法に併せて、治療に関する情報を提供することが大切であると思われる。そのためには、若者男女にとって身近な「学校」や「駅」などの「公共機関」、感染不安のある受検者が集う「病院」「保健所」、若者男性がセックス相手と出会うことの多い「風俗店」等を情報発信の中核とし、そこから「インターネット」や「SNS」を活用して正しい情報へ定期的にアクセスできる仕組みを構築することが重要である。

ただし、この調査は、A 自治体（府市）における受診者を対象としており、全国の状況を把握するには限界がある。また、全国の受検者を対象とした郵送検査受検者においてもサンプル数が十分とはいえない。そのため、これらの限界を補うために、継続的に調査を実施中である。

## F. 発表論文等

本テーマに関する発表論文はありません。

## G. 引用

なし